

神科學研究獎勵金を下附された研究だけに史料の探究も凡ゆる方面に亘り、考察の精確、敘述の詳細、後進を益するところ多大なるものがある。

たゞ、京都經濟史の書名よりして、以上の外に吾人の深く教へを求めたいのは古き京都の新しき産業都市への蟬脱の過程であつた。京都は古くも西陣を有し單なる消費都市ではなかつた筈である。明治初年、西陣の持つてゐた産業上の地位は恐らく日本的であつた。そして京都府の殖産興業政策も此れを中心として行はれたことは本書に散見してゐるところでもある。單に政策的な面からでなく、生産そのもの、面から新しい京都の更生が教へられて欲しかつた。事實、此うした問題に答へて戴くには著書は恰好な人であるから。

とまれ、五百七十餘頁の大作、史料豊富にして考證精緻、在住十七年ひたすら京都への思慕の情を持ち續けた(序文より)著者にして確に此の著ありの感が深い。著者は目下、京都市史編纂の任にあり明治初期京都市經濟史の體系的な綜合的な勞作に従事されてゐると聞か、かゝる精緻な研究の上に立つた新しい勞作こそ吾人の期待して止まざるところである。(A5版・五七八頁・大雅堂刊・六圓貳拾七錢)(奈良本辰也)

上代の土地關係

清水三男著

最近に於ける上代史の研究は、特に家族と村落をめぐる諸問題に關して、東都の新進學徒たる石母田正・藤間生大氏らの努力により、著しい進歩を示してきたが、本書は主として中世村落の研

究に精進された著者が、この石母田氏の相づくまじめな研究に觸發されて、自己の懐かれる奈良時代土地關係に關する見解をまとめられるに至つたものである。さきの兩氏がが一中心問題に對する新見解を提示するに急であつて、稍もするとその反面に對する省察やより廣い立場への立脚を忘れ勝ちであつたことを考へ、この點に特に留意しつゝ、正しい土地制度の理解に協力しようとしてゐる。

先づ第一班田收授法の基底についてに於いて、この法は郷戸單位に行はれたものではあるが、これは租庸調負擔の責任單位であつて當時の農業經營の基本單位であつたのではないと新説を反駁され、郷戸の内部に發生した房戸が墾田を獨立經營せる諸例を擧げ、當時の國家經濟を支へたものは、奴婢や浪人をかゝりうる郷戸主のみでなく、むしろ奴婢を持ち得ず家族員一同が刻苦精勵した如き郷戸・房戸がその中心をなしたことを説かれた。舉例が一々適切であるなにも、上代の戸籍計帳に見ゆる「逃」を戸口の流浪ではなくして郷戸の分裂を示すものと解されるなど至妙と云ふべきものがある。第二莊園制と律令制の關係一に於いては、先づ莊園の本質が不輸不入といふ形式の成立にあるのではなく、莊園領主と莊民の間に成立した私的な結合關係にあることを力説し、次に莊民の律令的負擔關係はそのまゝ、莊園關係に持越されたものであると述べて從來の如き假空の公式を一蹴され、かくて莊園關係は公的關係から脱却せんとする私的關係ではあるが、我國に於いては決して國家權力から離反したのではなく、同權力の下

に於いて地方地主が國郡司の支配下より中央貴族との結合へ體制の轉換を行つたものであり、この新關係を律令法の根據により合法化せんとする苦心が、從來の起源説となつて表面化したのであることを論ぜられた。兩制の親近關係を示す例を多く紹介されてゐるなかにも、平安初期既に政府官衙に屬する莊の存在を説かれるなどは最適例と云ふべきであらう。「第三莊園の不輸入性について」に於いては、最近藤間氏が初期莊園が地方豪族の奴婢使役に於いて成立したことを主張し、奴婢が不課口であつた所から不輸入性が來たのであると説明されたに對し、その矛盾をすどく突かれ、不輸入に就いては莊民の免と莊園領主の爲の免の二面の區別に注意すべきであるとし、莊民の免は土地所有の權の莊園領主の免は土地領有の權の發達に結びつけて考へるべく、前者は園宅に後者は莊家に根源を求むべきを提唱された。「第四宅地の「戸主」について」に於いては、都城が營まれそこに宅地が創められたとき、その宅地の測量上の單位として「戸主」のあることを紹介されつゝ、都會生活に於いては大家族の一戸内に於ける共同生活が無意味であり、早く單一家族單位の生活に分化したことを考へられ、更に中世都市生活には農村的要素の多く認められる事實を説明され、最後に「戸田」についても言及せられるところがあつた。「第五奈良時代の村」に於いては、當時の村落生活が郷戸を中心とする血縁による結合から成つてゐたものゝみでなく、史料的には自然村落である村落體の地縁による結合が考へられねばならず、むしろ後者が根強く存續してやがて室町時代の郷村制の中に

再びその姿を現してくと結ばれた。「第六國衙領と武士」の一篇のみはすでに本誌上に發表せられたものである。

全六篇が廣い範圍にわたる史料蒐集と極めて正確なる解釋の上に立ち、その行文至るところ含蓄ある論考であるのに、いま限られた紙面に單なる梗概を記述したのであつては、到底本書の全貌を充分に盡しがたい。併したゞこの拙き紹介によつても、本書が如何に多くの卓越せる意見を含んでゐるか、概ね推察せられうるかと思ふ。著者は先般名譽ある召集を受け勇躍皇軍の第一線に立たれたが、私は武運の長久を深く念ずると共に、銃後に遺されたこの上なき置土産を、こゝに更めて謝したいと思ふ。(A5版・假綴一六一頁・伊藤書店刊・定價壹圓六拾錢)(林屋辰三郎)

ルネサンス文化の潮流

大類 仲著

近代の超克といふことが論議される様になつてからルネサンスに關しても種々なる見解が述べられて來た。それは西洋近代精神を問題とした場合その出發點となつたルネサンスの本質が重要な問題となつて來るからである。かやうにルネサンスの性質探究が識者の多大の注目を引いてゐる折柄上梓されたのが本書である。本書は次の如き諸論文より成つてゐる。「ルネサンスの人間觀」「ルネサンスからバロックへ」「ルネサンスへの反省」「日本のルネサンス―桃山時代―餘録バロック美術論抄五篇である。即ち、本書に於ける著者の主題はルネサンスと共にバロックである。以下筆者は本書に於て特に興味を引かれた二三の點について述べて見たい